

教科書のなかの坂口安吾 — 「ラムネ氏のこと」論 —

Ango Sakaguchi in a Textbook: "Iamuneshi no koto"

原 卓 史

HARA Takashi

はじめに

本稿は、高校二年生用の「現代国語」の教科書に、教材として採用されている坂口安吾「ラムネ氏のこと」(『都新聞』一九四一〔昭和一六〕年一月二〇〔二二日〕)を取り上げ、作品の読解を通して、教科指導上の諸問題を明らかにしていくことを目的としたものである。まず、教科書ガイドを確認することから始めよう。たとえば、『筑摩書房版 現代文 新訂版 学習書』(協学出版 二〇〇八〔平成二〇〕年三月)は、次のように指摘している。

この文章が書かれた一九四一年当時は、太平洋戦争勃発の直前、軍国主義体制の下に、国家への批判は封じられ、自由主義的なものはすべて弾圧の対象となった時代である。筆者は、その重

苦しい時代とラムネ氏の出ない暗黒の時代を重ね合わせているのである。[...]そして、そうした思想的な暗黒時代において、少数の戯作者は、色恋のざれごとを書いて、時代の風潮に反抗した。その生き方に、筆者は、一見たあいなくこっけいであっても、物のありかたを変えてきたラムネ氏の精神を見いだしたからである。

安吾は「軍国主義体制」という「時代の風潮に反抗した」作家と見なされている。そもそも「ラムネ氏のこと」を抵抗文学として最初に取り上げたのは、花田清輝・佐々木基一・杉浦明平『日本抵抗文学選』(三一書房 一九五五〔昭和三〇〕年一月)であった。その後、益田勝実が国語教科書に当該作品を採用し、「堂々と時代に抗しての文学者としての〈志〉の表明」をした文章と評価するの

である^{注二}。こうした読みは、坂口郁^{注二}や、関口安義^{注三}などの諸論文にも受け継がれてきた。戦争に向かう時代のなかで芸術的抵抗をしめした作品という定説となつて、学習指導書にもこの解釈が採択されているのである。

しかし、本当に安吾が当時の時代状況に対して批判した作品としてのみ読んでいいのだろうか？ それほど事態は単純な問題ではないようにも思われる。そこで、本稿では、まず当該作品の構成と論旨の展開を確認することからはじめたい。そして、成立事情についても考察し、「ラムネ氏のこと」の作品の成立過程を考察していく。さらに、安吾の他の作品などの叙述も踏まえ、時代の状況とどのように対峙した作品と読めるのかについての考察を行う。以上の考察を通して、先行研究や学習指導書などで示されている定説について、いかなる問題があるのかを明らかにしていく。

一 「ラムネ氏のこと」の構成

坂口安吾「ラムネ氏のこと」は、『上』、『中』、『下』の三回に分けて連載された作品である。まずは、それぞれの章立ての内容を分析することから始めたい。

『上』の構成は二つの話題から成っている。一つ目の話題は、三好達治、小林秀雄、島木健作、坂口安吾たちによるラムネ談義である。三好によれば、「ラムネはラムネー氏なる人物が発明」したのだとし、「フランスの辞書にもちやんと載つてゐる事実」だと断言するのである。ありあわせの辞書で調べたが「ラムネー氏」は現れ

ず、三人は大笑いをした。三好達治が憤然として「プチ・ラルッスに載つてゐるのを見たことがある」という。後日「プチ・ラルッス」を調べてみたが、「ラムネー氏」は載っていないかわりに、「フェリシテ・ド・ラムネー氏」が載っていたと記す。そして、「尤も、この哲学者が、その絢爛にして強壯な思索をラムネの玉にもこめたとすれば、ラムネの玉は益々もつて愛嬌のある品物と言はねばならない」と結ぶ。ここで注目しておきたいのは、坂口安吾がラムネの玉を発明した人物に注目していることである。そして、その発明者を高く評価していることである。

二つ目の話題は、フグの毒についてである。「我々は事もなくフグ料理に酔い痴れてゐるが、あれが料理として通用するに至るまでの暗黒時代を想像すれば、そこにも一篇の大ドラマがある」とする。そして、その「ドラマ」を太郎兵衛と頓兵衛に仮託して語るのである。「爾来この怪物を食つてはならぬと遺言した太郎兵衛」もいるだろうが、「俺は不幸にして血をしぼるのを忘れたやうだが、お前達は忘れずに血をしぼつて食ふがいゝ。〔…〕かう遺言して往生を遂げた頓兵衛がゐるに相違ない」と記す。つまり、何の発明もせず死んでいった太郎兵衛と、何らかの発明をして死んでいった頓兵衛の違いが指摘されているのである。「血」を絞れ、「胃袋」を取り除け、「肝臓」を取り除け、「臓物の一つく」を取り除けなど、様々な遺言を残して死んでいった数多くの頓兵衛がいたのである。その歴史が積み重なつて、ようやくフグを食べる発明をした人物として、幾千百の頓兵衛が高く評価されているのである。

以上、二つの話題から引き出されることは、何らかの発明をした

人物、すなわちラムネ氏を論者である坂口安吾は高く評価していることである。

『中』についても二つの話題に注目したい。一つ目は論者である「私」（坂口安吾がモデル、筆者注）のことであり、もう一つは茸とりの名人についてである。まず、「私」について見てみよう。「私」が若園清太郎と信州の奈良原鉦泉に逗留したときのことが描かれている。この鉦泉では、「毎日毎晩、鯉と茸を食はせ、それ以外のものは稀にしか食はせてくれぬ」ところであった。そこで出される茸は「決して素性ある茸」ではなく、「現れた茸を睨むや、先づ腕組し、一応は呻つてもみて、植物辞典があるならば箸より先にそれを執らうといふ気持に襲はれる茸」なのだという。「私」は結局その茸を食べることができなかつた。そして、「私のやうに恐れて食はぬ者の中には、決してラムネ氏がひそんでゐないといふことだ」とし、「私」は「ラムネ氏」ではないことが示される。

二つ目の話題となる茸とりの名人の話に移ろう。この奈良原鉦泉の集落には茸とりの名人がいて、「この名人がとつてきた茸であるから、絶対に大丈夫」だと宿の者はいう。しかし、「私」の逗留中に、「この名人が、自分の茸にあたつて、往生を遂げてしまつた」のである。しかも、その「臨終のさまを訊ねてみると、名人は必ずしも後悔してはゐなかつた」という。そして、「この部落では、その翌日にもう人々が茸を食べてゐた」ことが記される。何の毒に当たつて死んだのかその分析をしない茸とりの名人も村人も、何らかの発明をしていないという点で、「ラムネ氏」ではなかつたと指摘される。つまり、この村には「ラムネ氏」はいなかつたのである。

『中』の二つの話題から引き出されることは、茸の毒を恐れて食

べない「私」も茸の毒について何の発見もしない村人も、「ラムネ氏」ではないことである。ただし、「ラムネ氏は必ずしも常に一人」であるとは限らず、「かういふ暗黒な長い時代にわたつて、何人もの血と血のつながりの中に、やうやく一人のラムネ氏」が潜んでいるかもしれないということである。言い換えれば、二つの話題から「ラムネ氏」はいなかつたとされるが、潜在的な「ラムネ氏」の存在の可能性を示唆しているのである。

『下』についても、二つの話題に注目しつつ検討していこう。一つ目の話題は「愛」についてであり、二つ目の話題は「文学」についてである。まず、「愛」についてであるが、日本に切支丹が渡来したとき、「愛」といふ字の翻訳に、彼等はほとほと困却した。「愛は直ちに不義を意味」したからだ。西洋の「愛は喜怒哀楽ともに生きくとして、恐らく生存」に裏打ちされるものであるのに対して、日本の「愛は結合して生へ展開することがなく、死へつながる」ものであるという。そこで伴天連は、「アモール（ラヴ）に相当する日本語として、『御大切』といふ単語をあみだした」のである。「この発明も亦、やむを得ないこと」であつたという。ここでも言葉の発明を消極的ながら、評価していることが確認できる。

二つ目の話題の「文学」について、愛を邪悪ととらえる時代に、そうした「公式」に反抗を試みた人々を「戯作者」と呼ぶのだとする。そして、「戯作者も亦、一人のラムネ氏ではあつたのだ」と記す。「文学」の問題についても、戯作者を「ラムネ氏」とみなし、そうした人々を評価していることが伺える。そして、発明するもの「結果の大小は問題でない」のであつて、フグであれラムネであれ、何かに「徹する者のみ」が「物のありかたを変へてきた」ので

ある。それが「一生の業とするに足りる」こととして、高く評価されている。このように、『下』でも、何かを発見する人が評価されているのである。

以上、『上』『中』『下』の各章の構成と論旨の展開を検討してきた。それぞれの章について、二つの話題に注目してここまで検証してきた。安吾が評価しているのは、何かを発明する「ラムネ氏」である。とひとまずは言えるだろう。何も発明しない存在は「ラムネ氏」とは言えないが、ただしその中にも潜在的に「ラムネ氏」になる可能性のある者がいることも示唆されているのである。

二 作品の成立過程 (一)

「ラムネ氏のこと」の成立過程を考える上で、見過ごせないのが全ての章で坂口安吾自身の体験が語られていることである。そして、辞書についても語っていることである。以下、これらが当該作品においてどのような意味を持つのか、また作品の成立事情をさぐるることによって何が見えてくるのかを検討してみたい。

まず、小林秀雄、島木健作、三好達治、坂口安吾の四名が集まった日のことを、安吾は「釣り師の心境」のなかでも記している。^(註10)「六月一日の鮎の解禁日に大いに釣ろう」と思い、三好達治が「小林秀雄と島木健作のところへ六月一日に鮎を食いに来い」という案内状を発送^(註11)した。案内に応じた小林秀雄、島木健作が「馬鹿正直」にやってきた。早川では「メダカ」のような鮎しか釣れなかったが、「三好の門弟が酒匂川で釣ってきた二〜一五センチ大の鮎およそ

二〇〇匹」を持ってきてそれを肴に酒を飲んだという。それは、「昭和十六年の六月一日のことであつたと思う」と記している。

この一日の出来事については、金原左門の研究が詳しい^(註12)。金原によれば、三好の門弟の一人であつた鈴木貫介に聞き取りをし、「前年」のこと、すなわち一九四〇(昭和一五)年六月一日に集つたのだという。安吾がいう「三好の門弟」とは、鈴木貫介とその弟保次の兄弟であると金原は明らかにしている。鈴木貫介「年譜」^(註13)を参照してみると、「昭和十五年(一九四〇)二十三歳」に、「二月、作家坂口安吾を知る。三好達治にすすめられて文学の古典を読む。〔…〕六月、鮎漁に招かれて三好達治のところに来た、島木健作と識る」とある。いづれにせよ、このメンバーが集まり、鮎を肴に酒を飲んだのが、一九四〇(昭和一五)年六月一日だったということである。

そして、そのときにラムネの玉の発明者に話がおよび、辞書が持ち出されたのである。ここでいう辞書とは、「プチ・ラルス」のことである。ちなみに、『NOUVEAU PETIT LAROUSSE ILLUSTRÉ : dictionnaire encyclopédique』(Paris : Larousse, 1940) のフエリメンテ・ズ・ラムネーの項目を参照してみよう。

LAMENNAIS(Félicité de), philosophe français, né à Saint-Malo. Entré dans les ordres, il fut l'apologiste excessif du principe théocratique, mais devint l'apôtre fougueux des doctrines révolutionnaires, en passant par le libéralisme catholique. La première phase de sa vie est marquée par l'Essai sur l'indifférence en matière de religion, et la dernière par les Paroles d'un croyant. Ecrivain brillant et

fougueux, Lamennais fut aussi un penseur vigoureux, mais mobile(1782-1854).

訳・ラムネー(フェリシテ・ド)サン・マロー生まれでフランスの哲学者。彼は過度の教権政治原理の護教論者であった。しかし、カトリックのリベラリズムを通じて、革新的な教義の熱烈な使徒となった。彼の人生の最初の局面は、『宗教的無関心論』で示されている。血気盛んな優れた作家ラムネーは、また生き生きとした力強い思想家であった(一七八二〜一八五四)。

右線部を安吾は「絢爛にして強壯な思索の持ち主」と訳した。ラムネーはもともと護教論者であったが、革新的な哲学者へと変貌をとげたことが記されている。革新的な人物へと変貌を遂げたラムネーに安吾は魅かれたのだろう。「ラムネー氏のこと」が発表された一九四一(昭和一六)年頃、安吾もまた革新的な文学者に変わるうとしていたのである。ただし、その変化の内実については『上』では記されていない。このとき、安吾もまた、何らかの「発見」を願うひとりの「ラムネー氏」になろうとしていたのである。

次に『中』の成立事情を探ってみよう。『中』の安吾と若園清太郎の奈良原鉞泉での療養のエピソードは、若園清太郎「わが坂口安吾」^{註七}のなかで、回想を残している。一九三五(昭和一〇)年七月、「胸膜炎」を患った若園のために安吾、葛巻義敏、山沢種樹、隠岐和一など十数名のアテネ・フランセの友人たちが「カンパ」をして、若園を療養させることになった。安吾が信州へ七月下旬に先乗りをし、奈良原鉞泉の宿を決め、しばらくした八月上旬に若園もやってきた。そして、「安吾と私の生活が三週間ほど」続いたのである。

若園が療養を終え八月下旬に奈良原を出立したあと、安吾は九月上旬まで奈良原に留まった。約二ヶ月間滞在していたことになる。

この奈良原での食べ物は、やはり若園にとっても「不味い」ものであったようだ。しかし、不味かったのは鯉と茸しかなかったからではない。「宿泊料二食つき九十銭」という安値のためで、いい食事を出してもらえなかったからだ。安吾は「ラムネー氏のこと」のなかで、若園が連日東京に手紙を出して缶詰を取り寄せたと記しているが、若園によれば「旅館で売っている鯨肉缶詰」と「東京から持参した『是はうまい』というフリカケ食品」で食膳を賑わせたのだという。また、安吾が「五日に一度ぐらい」「酒を飲みに行く」ために奈良原鉞泉を下りていたことも明かしている。このように、安吾と若園の記述を比較してみると、食事の不味さは共通しているものの、他の食べ物の求め方には相違があるのである。

こうした食べ物の記述で問題となるのは、茸の毒についてである。食卓に並ぶ茸を見て、「植物辞典があるならば箸より先にそれを執ろうという気持ちに襲われる」ということが記されているので、実際に「植物辞典」を手にとったというわけではないだろう。だから、出典を特定することはできない。ただ、参考までに一九四一(昭和一九)年当時について、閲覧可能な最も詳細な資料の一つである牧野富太郎『牧野日本植物図鑑』^{註八}を提示しておきたい。

まつたけ／秋季、赤松林ニ多ク発生ス。又榊林ニモ生ズ。時トシテ夏季ニモ発生シ、是ヲ俗ニさまつト云フ。別種ニ同名ノさまつナルモノアリ。蓋ハ初メ半球状ニシテ、次第ニ開キ突円形トナリ、終ニ扁平ニ展開ス。襖ハ終マデ白色ナリ。蓋ノ十分開

カザル間ハ下面ニ綿毛状ナル蓋膜アリ。蓋膜ハ後破レテ一部ハ不明瞭ナル鏝トナリテ茎に存シ、一部ハ蓋ノ周縁ニ附着シテ残ル。味ノ美ナルト、芳香ヲ有スルトニヨリ、本邦人ノ最モ好ムモノナリ。

まつたけを取り上げたのは、「松茸ならば、誰しも驚く筈がない」と「ラムネ氏のこと」のなかで記されているからである。茸の特長が文章化されるとともに、挿絵が示されている。食すことができるか否かは、まつたけであればさほど難しくはないのかもしれない。しかし、他の名前の知られていない茸であればどうだろうか。形、色、植生地、香りなどで判断することになるのだろうか。「植物辞典」を参照しただけでは判断が付きにくい。結局、「名人」の言葉を信じて茸を食べるか、食べないか、選択を迫られることになる。ここで「私」が選択したのは、「恐れて食はぬ」ことであつた。そうした態度は「決してラムネ氏がひそんでゐないといふことだ」と自己批判されることになる。一九三五（昭和一〇）年頃の安吾は、茸を食べる挑戦をしなかつたという点で、自分が「ラムネ氏」になれなかつたことを告白しているのである。もちろんここでは直接的には茸を食べないという態度を指している。

三 作品の成立過程 (二)

一九三五年の時点では「ラムネ氏」ではなかつた安吾が、一九四一年の時点で「ラムネ氏」になろうとしていたことを前章で

明らかにしてきた。では安吾にとつての「ラムネ氏」とはどのようなものだったのだろうか。これを明らかにするためには、『下』の安吾の体験について分析しなければなるまい。ここで示されている安吾の体験とは、近世戯作文学と切支丹文献の受容についてである。まず、戯作者についてであるが、金内仁志がすでに山東京伝「仕懸文庫」が典拠である可能性を指摘している^{〔九〕}。なるほど、金内が言うように、内容的にも合致しており、典拠である蓋然性が高い。しかし、「ラムネ氏のこと」で具体的に示されているのは、近世の戯作文学そのものではない。ここで示されているのは、清姫、法界坊、天の網島、鳥辺山といった、謡曲、浄瑠璃、歌舞伎などの舞台芸能である。では、それぞれの物語とはどのようなものだったのだろうか。以下、一九四一年に安吾が参照することのできた文献に基づき内容を要約してみよう。

清姫^{〔一〇〕}は、紀伊国道成寺の鐘供養に白拍子がやってきて女人禁制の寺内で舞うが、鐘への恨みを述べて、鐘の中に隠れてしまう。住僧が、昔、恋の執心から毒蛇となつて山伏を鐘もろとも焼き殺した娘の話を語る。今の白拍子はその執心であろう、と。それで寺僧たちは必死に祈ると、蛇体が現われ日高川に飛び込むという物語である。法界坊^{〔一一〕}は、吉田松若丸は家宝の鯉魚の一軸を取り戻すため手代の要助となり、永楽屋の娘おくみと恋に落ちて許嫁の野分姫を邪険に扱う。おくみに横恋慕する法界坊は一軸を奪い野分姫を殺すが、吉田家家臣の妻おさくに殺されてしまう。野分姫と法界坊の亡魂が合体して要助とおくみを悩ますが、おさくが所持する一軸で正体を現わし、釣鐘に飛び入る物語である。天の網島^{〔一二〕}は、曾根崎新地の遊女小春と紙屋治兵衛は恋仲にあつたが、周囲の者達が二

人を逢せないようにしていた。しばらくして治兵衛の恋敵の太兵衛が小春を身請けするということを聞いた治兵衛の女房おさんは、小春の気持を察して治兵衛に身請けさせようとする。おさんの叔父五左衛門が来て怒り、おさんを別れさせてしまう。ついに治兵衛と小春は死を決意し、網島の大長寺で心中するという物語である。鳥辺山^{三三}は、梅垣源五兵衛と腰元おまんが密会していたところ、国禁の銃声が聞こえる。発砲したのはおまんの兄長谷川勘介であった。連累^{れんるい}がおまんに及ぶのを怖れた勘介は毒を飲んで死んでしまう。おまんが罪人の妹と責任を追求されたため、源五兵衛とおまんは悲観して鳥辺山で心中をする物語である。

これらに共通するのは、かなわぬ恋である。ここで注目したいのは、「隅田川続篋」と「鳥辺山心中」で「不義」という言葉が用いられていることである。前者は要助が野分姫という許嫁がいるにもかかわらず、おくみと恋仲になっていることに対して「不義」という言葉が用いられている。後者は源五兵衛とおまんが未婚であるにもかかわらず密会することに対して、彼ら自身が「不義」の意識を持つている。このように、安吾が踏まえた「戯作」のなかで、かなわぬ恋が「不義」と語られているのである。

しかし、安吾自身は「不義」という行為を描く文学を否定しているわけではない。いや、むしろ「ともかく人間の立場から不当な公式に反抗を試みた文学」として、「不義」を描く作品群を評価している。「結果の大小」はともかくとして「物のありかたを変へてきた」文学なのであり、近世の戯作者の文学活動を「一生の業とするに足る」ものとして評価しているのである。

かかる評価の仕方は、近世の戯作文学だけではなく、切支丹文献

に対しても見られるものであった。安吾がはじめて切支丹に触れたのは、「三好達治に勧められてであった。そのときの出来事について、安吾は「篠笹の陰の顔」のなかで、「私は近頃切支丹の書物ばかり読んでゐる」と記している^{三三}。様々な切支丹文献を読む過程で、安吾は「愛」と「恋」の言葉の意味の違いについても興味を持つようになったのだろう。二つの言葉の違いについて、安吾はここでは辞書に言及している。たとえば、土井忠夫・森田武・長南実編^{ちゆうなん}『邦訳 日葡辞書』には、「Coi コイ(恋)」と「Taixet タイセツ(大切)愛」が立項されており、次のように記されている^{三五}。

Coi: コイ(恋) 愛情、または、よこしまな慕情。Coi: Eo sun (恋をする) 愛情、または、みだらな慕情を抱く。※1) 原文は *saudades ruis*。このように、恋 に対して、よこしまな、肉欲的な、愛情に限定した注は、次条にも、別条 *Rabo* (恋慕) などにも見られ、羅葡日にもその例がある (*Mimographus: Minus*)。これは、清らかな愛、神の愛に対して、人間の男女間の愛を肉欲的なみだらなものと見るキシタンの宗教的な立場からの説明とみられる。これに対して、愛 一般を表わすのには、別条にある *Taixet* (大切) を用いたのであって、羅葡日も同じである (*Amor: Pietas*)。

Taixet タイセツ (大切) 愛 1) *Taixehni moyuru* (大切に燃ゆる) 愛に燃える。 *Taixetuo (cucusu)* (大切を尽す) この上なく愛する、あるいは、深い愛と厚遇を示す。 *Taixehni zonzuru, Ibonó* (大切に存ずる、または、思ふ) 愛する。 ※1) 原文は *Amor: (Coi) (恋) の注*

「[aixet]」には「愛」を、「[oi]」には、「よこしま」で「みだらな」愛情を示し、使い分けがなされている。「愛」を大切と考える資料は他にもある。新村出『日本の言葉』^{註七}を見てみよう。

されば基督教のアモール即ちラヴにあたる洋語を訳する場合に、吉利支丹教徒は必ず当惑したにちがひない。当時の日本の俗語中からは、愛といふ語では表現し得なかつた。〔…〕デウスの御大切の言葉とは、今日の語では、神の愛の言葉といふことである。

浅子逸男は、新村書の右の個所を引用した上で、安吾は「愛は直ちに不義を意味した。」という、新村のエッセイにはない解釈を付けてくわえている」と指摘している^{註七}。このように、安吾は「愛は直ちに不義を意味した」という解釈を付け加えたのである。辞書で指摘した「恋」は、「よこしま」な「みだらな」愛情であった。一方、戯作文学が描いたかなわぬ恋は「不義」の世界であった。安吾は「よこしま」な「みだらな」恋と、「不義」の恋とを接続させたのである。そして、戯作文学も切支丹も、「物のありかたを変へてきた」ものとして評価したのである。もちろん、安吾自身もまた、「戯作者」になるうとしていたことが窺えるのである。つまり、安吾にとっての「ラムネ氏」とは、自分が「戯作者」になることであった。

ここまで、作品の成立の背景を探ってきた。その結果、一九三五(昭和一〇)年当時、「ラムネ氏」になりきれなかった安吾が、一九四〇(昭和一五)年頃を境に、「ラムネ氏」＝「戯作者」になるうとする様相が浮かび上がってきた。こうした安吾自身の変化と、

軍国主義の時代へと向かう日本の状況とが重ねられ、安吾が時代に抵抗する文学者として、評価されてきたように思われる。次に、一九四〇年代前半の安吾の文学活動を検討することを通して、時代に抵抗する文学者としての安吾像の再検討をはかりたい。

四 坂口安吾とその時代

ここまで、「ラムネ氏のこと」の論理を作品の成立過程と重ねながら検証してきた。なるほど、従来指摘されてきたように、当該作品は芸術的抵抗を示した作品であると読むことは一面では正鵠を射ているように思われる。しかし、一九四〇年代前半の坂口安吾文学を俯瞰してみると、ことはそれほど単純ではない。まず、坂口安吾の時局に抵抗する言説を確認してみよう。たとえば、安吾「死と鼻歌」(『現代文学』一九四一(昭和一六)年四月)では、講談や浪花節の「長短槍試合」の話が登場する。豊臣秀吉が織田信長の幕下にいたとき、百名ずつで長短の槍試合をすることになった。長槍を主張したものが連日猛訓練をしたのに対して、短槍の秀吉は連日「馳走攻めにして試合で勝った。「今迄は余り口演」されなかったこの話が、「俄に講談や浪花節」で取り上げられるのは、「多分時局に対する一応の批判」が含まれているからだろうと推測するのである。「長短槍試合」の内容を「時局に対する一応の批判」として読んでいく。そして続けて「酒」がなくならず、「遊び」がなくなっていく時代状況に対して、「皮肉」をいうという抵抗を示したと指摘しているのである。

では、次は時局に迎合していることについても見てみよう。まず、安吾は国策組織である日本文学報告会（一九四二〔昭和一七〕年五月成立）に参加している。そして、「伝統の無産者」（『知性』一九四三〔昭和一八〕年五月）を、日本文学報告会編『辻小説集』八絃社杉山書店 一九四三〔昭和一八〕年七月）に収録しているのである^{（注一八）}。こうした時局に迎合する態度のみならず、文章も発表している。

戦争といふ言語を絶したこの唯一の場面に直面しては、在るものは、たゞ、勝利、それが全部だ。価値あるもの、美、真理、正、すべてはたゞ勝利につきる。必勝の信念と祖国愛以外のものは凡そ空虚で馬鹿らしい。（『文芸時評』（二）偉大な戦記）『都新聞』一九四二〔昭和一七〕年五月一〇日

ここでは、「戦争」には「勝利」しなければならぬと記されている。国策に対して肯定的な見方を示した文章と見なしている。以上のように、一方で芸術的抵抗を示し、また一方で国策を肯定する言説を提示しているのである。安吾作品にはこうした振れ幅があることを確認しておくべきであろう。つまり、安吾の言説は和戦両様の構えなのである。ある特定の思想に固まらないこと。そうした特徴を見逃すべきではない。その特徴が端的に表れているのは、「真珠」（『文芸』一九四二〔昭和一七〕年六月）である。太平洋戦争が始まった一九四一（昭和一六）年二月八日のことを次のように記す。

僕はラヂオのある床屋を探した。やがて、ニュースが有る筈である。客は僕ひとり。頬ひげをあたつてみると、大詔^{（たしよ）}の奉読、ついで、東条首相の謹語があつた。涙が流れた。言葉のいらぬ時が来た。必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ。一兵たりとも、敵をわが国土に入れてはならぬ。

戦争が始まることを伝えるラヂオに「涙」を流す「僕」。「必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ」と言いながらも、「僕」は小田原から国府津へかけての界隈を酒と食べ物を探して歩く人物である。率先して「命」を捧げるような人物としては描かれていない。戦争という時局に「和す」発言をする一方で、「行動が伴わない」「僕」は時局に対して抵抗してもいるのである。こうしたダブル・スタンダードの態度をとる作品が、安吾文学には他にも見られる。それは、「巻頭随筆」（『現代文学』一九四三〔昭和一八〕年六月）である。

一億総力をあげて国難に赴くときになった。／飛行機が足りなければ、どんな犠牲を忍んでも飛行機をつくらねばならぬ。船が足りなければ船を、戦車が足りなければ戦車を、文句はぬきだ。国亡びれば我ら又亡びる時、すべてを戦ひにささげつくすがい。〔…〕その代り、僕が筆を握つてゐる限り、僕は悠々閑々たる余裕の文学を書いてゐたい。

「戦争」に勝つために「飛行機」を作れという一方で、「僕」は「悠々閑々たる余裕の文学」を書いていたいという。戦争に協力すべきときがきたら協力するが、その時が来るまでは文学に専念していると

いうことの宣言に他ならない。時流に和す発言をしつつ、その時流と戦うこと。和戦両様の構えこそが安吾文学の特徴なのである。ここまで見てきたように、安吾作品には時局に抵抗する発言をするこどもあれば、時局に迎合する発言をするこどももあった。安吾文学は、国策というものに対して揺らいでいることが窺える。

では、なぜこのような態度を一九四〇年代前半の安吾はとっているのだろうか？ そこには検閲の問題が関わっているものと推察される。当時の検閲の実態とは、思想的に危なそうなものに目星をつけるというもので、全体を丁寧に見る時間的余裕はなかったということが近年あきらかにされつつある^{注九}。このように、検閲も揺らいでいたのである。それゆえ、検閲を通過して作品が発表される可能性があったのである。安吾の揺らぎとは、揺らぐ検閲を通過させるための戦略にほかならなかったのである。

ここまで、以下の四点について論じてきた。①『上』『中』『下』のいずれも二つのエピソードを紹介し、何かを発見する人を評価していること。②「ラムネ氏のこと」の執筆背景を探り、一九三五年の時点では安吾自ら「ラムネ氏」にはなれていなかったが、一九四〇年頃には「ラムネ氏」に変わろうとしていたこと。③安吾自身が「ラムネ氏」になることは安吾が戯作者になり、新たな文学の発見を追求していくことであったこと。④芸術的抵抗と国策協力の間で揺らぎながら、自らの文学を発信していくこと。以上、教科指導上の問題点として指摘できることである。①～③については、これまでの研究では指摘されてこなかった資料なども提示しながら論じてきた。しかし、④については、教科書ガイドなどに代表され

る定説に修正をせまるものといえるのではあるまいか。

「はじめに」で示したように、従来の研究史で「ラムネ氏のこと」は、国語教育の教材研究の立場から、「芸術的抵抗を示した作品」と読まれてきたことを明らかにした。一九八〇年代から今日に至るまで、この解釈が定説となってきた。戦争中に抵抗を示した作家として坂口安吾神話を作り出し、温存する装置として機能し続けてきたのである。しかし、こうした神話化された作家像は、安吾文学の他の側面、すなわち国策に迎合した発言もしていたという事実を見過ごすことにつながるだろう。いったん神話が形成されてしまえば、それを取り除くことは困難となることはいうまでもない。それゆえに、安吾を芸術的抵抗の作家という特定のイメージに縛りつけておくような方法はいまいじめなければならぬ。三〇年以上続けられてきた教科書ガイドの「芸術的抵抗を示した作品」という評価は相対化されるべきである。

では、それはいかに書き改められるべきなのだろうか。大事なことは、作家にとって都合のいい側面も都合な側面も過不足なく論じることである。そして、そのなかでの評価を提示することなのではなからうか。「ラムネ氏のこと」に限っていえば、戦時下のなかで芸術的抵抗を示した作品だといえる。しかし、安吾文学そのものは、芸術的抵抗と国策迎合の揺らぎのなかで様々な思考を實踐していたのである。その揺らぎのなかで、「ラムネ氏のこと」は芸術的抵抗の側面が色濃く出た作品ということになるのであって、安吾文学全体がそうした抵抗を常に実践し続けていたわけではない。このように、教科書ガイドをはじめとする「ラムネ氏のこと」の読解は、芸術的抵抗と国策協力の間で揺らぎながら、芸術的抵抗の極に振れ

た作品であったと改められるべきではあるまいか。

もはや、安吾文学を芸術的抵抗か国策協力かの二分法のどちらかの評価を下すべきではないことは明らかであろう。重要なのは、それらの間で揺らぎながらも、安吾自身がいかなる思想をも動員しながら、伝えたい言葉を世の中に発信し続けようとした営為そのものである。戯作者Ⅱ文学者として時代を変えるような新たな何かを「発見」し、世の中に問いかけること。揺らぐ検閲を通過するために、国策とどのような距離感をもって接したらいいのかを常に問い続け、様々な可能性を探ること。かかる過程を経て、坂口安吾「ラムネ氏のこと」は成立したのである。このように、芸術的抵抗や国策協力などの思想よりも大事な言葉があるとして、何かを「発見」していくことの大切さを説く安吾の「ラムネ氏のこと」は、国語教材として今日もなお意義を持ち続けているのである。

注

- (注一) 益田勝実『国語科教育法』(法政大学通信教育部 一九八一年三月、引用は『益田勝実の仕事』5 筑摩書房 二〇〇六(平成一八)年六月)
- (注二) 坂口郁「絢爛にして強壯な思索の文章に取りくむ―坂口安吾『ラムネ氏のこと』」(『国語通信』一九八三(昭和五八)年十一月)
- (注三) 関口安義『『ラムネ氏のこと』(坂口安吾)―暗黒な時代の抵抗精神』(日本文学協会国語教育部会編『講座／現代の文

学教育』新光閣書店 一九八四(昭和五九)年五月)

- (注四) 坂口安吾「釣師の心境」(『文学界』一九四九(昭和二四)年八月、引用は『坂口安吾全集』8 筑摩書房 一九九八(平成一〇)年九月)

- (注五) 金原左門『坂口安吾と三好達治―小田原時代(小田原ライブラリー1)』(夢工房 二〇〇一(平成一三)年十一月)

- (注六) 鈴木貫介『鈴木貫介全歌集』(皆美社 一九八八(昭和六三)年五月)

- (注七) 若園清太郎『わが坂口安吾』(昭和出版 一九七六(昭和五一)年五月)

- (注八) 牧野富太郎『牧野日本植物図鑑』(北隆館 一九四〇(昭和一五)年一月)

- (注九) 金内仁志『少数の戯作者』とは誰か―坂口安吾『ラムネ氏のこと』覚え書き』(『国語通信』二〇〇一(平成一三)年六月)、同『坂口安吾『ラムネ氏のこと』序論―『少数の戯作者』とは誰か』(『研究紀要(立教新座中学校・高等学校)』二〇〇二(平成一四)年三月)など。山東京伝「大磯風俗仕懸文庫」(寛政三年刊行、『帝國文庫(第四篇) 京伝傑作集』博文館 一九二八(昭和三)年一月)の「跋」は次のように記されている。「河豚羹を不食愚癡あり。くふ痴呆あり。くはぬ愚味は美味を不知。くふ素痴は有毒を知らず。毒あるを知らずして、くらふ人は論に不足。美味を知らずして、くはざる人は一概にして危し。不佞京伝、嘗好色淫蕩を著述すといへども、実は前に美味あることを述べて、後に毒あることを示し、戒を垂がため也。不如美味を知り毒をしつて

- 恐憤には。河拙はくひたし命は惜しとは、豈此境を悟したる、君子の言といはんや。孔夫子衛国の煮売家を過りて曰ことあり。吾未徳を好者吹魚を好が如くする者をみずと。嗟夫ホソニ、傾国傾城ものは、此鉄砲汁の勢ひにあらずして、何ぞや。みづから後にしるす。」
- (注一〇) 作者不詳「道成寺」(謡曲、一五五四〔天文二三〕年以前の完成。芳賀矢一・佐佐木信綱編「校註 謡曲叢書」第二巻 博文館 一九一四〔大正三〕年一月)
- (注一一) 奈河七五三助「隅田川続碁」(歌舞伎、一七八四〔天明四〕年初演。渥美清太郎編「日本戯曲全集第九巻 寛政期世話狂言篇」春陽堂 一九二八〔昭和三〕年一月)
- (注一二) 近松門左衛門「紙屋治兵衛きいの国屋小春 心中天網島」(浄瑠璃、一七二〇〔享保五〕年初演。『帝國文庫(第九篇)』近松世話浄瑠璃集」博文館 一九二八〔昭和三〕年七月)
- (注一三) 近松門左衛門「鳥辺山」(浄瑠璃、一七〇六〔宝永三〕年初演。『元禄歌舞伎傑作集』下巻 早稲田大学出版部 一九二五〔大正一四〕年六月)
- (注一四) 坂口安吾「篠笹の陰の顔」(『若草』一九四〇〔昭和一五〕年四月)。安吾の切支丹文献の受容については、拙稿「イノチガケ」論(『坂口安吾 歴史を採掘すること』双文社出版 近刊)を参照されたい。ただし、安吾が当時切支丹文献だけに興味を示していたわけではない。その根拠として、一九四〇(昭和一五)年八月九日付、尾崎士郎書簡坂口安吾宛を挙げておきたい。「扱書簡中の勝夢酔ですが小生更に存ぜず早速蘇峰の海舟伝を読んでみることにいたします」と尾崎は記している。この時点で、安吾が「安吾史譚」(その五)勝夢酔(『オール読物』一九五一〔昭和二七〕年五月)の典拠となる資料を読んでいたことが窺える興味深い資料である。なお、当該資料は小田原文学館に常設展示されている資料で、筑摩書房版『坂口安吾全集』に未収録の資料である(同文学館によれば、当該資料はカラーコピーで、原資料の所在地は不明とのことであった)。
- (注一五) 土井忠夫・森田武・長南実編「邦訳 日葡辞書」(岩波書店 一九八〇〔昭和五五〕年五月)
- (注一六) 新村出『日本の言葉』(創元社 一九四〇〔昭和一五〕年一月)
- (注一七) 浅子逸男「キリシタンと坂口安吾」(『国文学解釈と鑑賞』別冊 坂口安吾と日本文化』至文堂 二〇〇一〔平成一三〕年九月)
- (注一八) 櫻本富雄『日本文学報告会―大東亜戦争下の文学者たち』(青木書店 一九九五〔平成七〕年六月)
- (注一九) 鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重編「検閲・メディア・文学―江戸から戦後まで」(新曜社 二〇一二〔平成二四〕年三月)所収、宗像和重「第一部解説 抑圧と抵抗の諸相」と、大日向純夫「内務省の検閲と第二次世界大戦前日本の出版文化」とを参照した。